

## 『くらべる骨格 動物図鑑』

川崎悟司 [著], 大淵稀郷 [監修]

(新星出版社, 2019年8月5日, 143頁, 1,100円+税)

最初に本書は専門書や学術書ではなく絵本の類であることをあらかじめ断っておく。そのような書籍ではあるが、私は本書を「哺乳類科学」の読者に是非とも紹介したい。

私は現在、自分の専門とは少々離れている脊椎動物の形態と機能に関する講義をある私立大学で非常勤講師として担当している。主な対象学生は、基礎生物学が専門ではない学部の2年生である。従って講義は、わかりやすく面白い内容にする必要がある。講義の下準備のために形態学や解剖学に関する数多くの専門書籍や情報を収集したが、理解を容易にするための視覚に訴える構成に苦勞した。例えば、この動物のこの器官は人間でいうとこの部分にあたり、その機能はこのように変わっているのだ、ということをついといろいろと工夫して説明していた。今年度は講義を担当して2年目であり、講義スライドをアップデートするため新たな情報を収集していた。そのような折、たまたま購読している読売 KODOMO 新聞の記事に、この著者のイラストが紹介されていたのを目にした。それを見たとき、私が欲しかった画像はこれだ！と背中が痒いときに孫の手を得た気持ちになった。その著者について調べてみるとインターネット上にいくつかのトピックを公開しており、また本書のプロタイプと思われる本を出版していたが、その時はまだまとまった内容の本は出版されていなかった。そのため、それらのイラストをまとめた本をいつか出版して欲しいな、と思っていた。私の希望が通じたのか、程なくして新聞の書評だったか Amazon からの通知だったかで本書の出版を知り、躊躇なく発注した。

本書の何が独創的かというと、動物の形態が人間のどの部分に相当するかという比較を、海パンを履いた短

髪のある男の体が、話題の対象となっている動物と同じポーズをしているイラストが描がかれているのである。それがまたおかしく、わかりやすい図なのである。そして、その横に骨格透視図と人間のどの部分はその動物の器官に相当しているかを明示しており、これも視覚的にとてもわかり易い。例えば、ウマの項では海パン男が手と足の人差し指で四つん這いになっている図が描かれており（そしてこの格好は辛い、というリアクションをしている）、ヒトの中指とウマの足先が相同器官であることがひと目でわかるようになっている。

本書の構成を紹介しよう。本書は、(1) 歩く・走る、(2) 掴む、(3) 頭・首、(4) 食べる、(5) 悲しい、という5つの章からなっている。それぞれの章の関係は特に系統だったものではないが、形態の機能別にまとまっているのでわかりやすい。第5章の「悲しい」というのはわかりにくいタイトルであるが、昨今人気の動物バラエティー本のタイトルによくある「残念な,,」と同系列のものである。扱っている動物は哺乳類が主体であるが、鳥類、爬虫類、魚類なども登場している。また基本的に骨学に基づいた記載となっている。またフルカラーイラストで1,100円という価格設定もリーズナブルである。

著者はイラストレーターであり、監修者も科学コミュニケーターである。つまり研究のプロパーではない人によって作成された科学啓蒙書あるいはユーモア解説書である。しかも絵本である。しかし内容はあくまで科学的な成果に基づいており、また最新の研究成果についても触れている。また哺乳類研究の専門家であっても、比較解剖学や比較進化学の専門でない限り、本書のような広範囲な種とトピックに関しての形態を知っている人は少ないのではないだろうか？自分は哺乳類学の専門家である、というプライドをかなぐり捨てても、本書を読む（見る）価値は十分にあり、多くの「哺乳類科学」の読者にとっても新たな知識元となることは間違いない。私も本書で初めて知った知識も多くあった。ただし、本書には引用文献リストなどはないので、本書で扱われてる事象の真偽についての根拠となる原典は自分で確かめられたい。そこが一般読者とプロの研究者の読み方の違いである。

大館智志（北大低温科学研究所）

✉ohd@lowtem.hokudai.ac.jp